

都市公園としての宝ヶ池の森と生物多様性

森本幸裕（京都学園大学バイオ環境学部・京都大学名誉教授）

はじめに

地球環境の危機は「生物多様性の損失」が最も重大であり、ついでチッソの生物地球化学的循環、気候変動もすでに地球の安全運転の限界を超えているとされる（Rockström, et al. 2009）。生物多様性の危機に対して、国際条約や生物多様性基本法、生物多様性国家戦略が作られているが、生物多様性の主流化、都市や民間参画が重要な課題となってきた。これは、私たちが自らの生活と生活環境のなかで、生物多様性から見た現状を検証し、取り組みを進めることの重要性でもある。

1) 都市の自然としての宝ヶ池公園の森の意味

千年の都といわれる京都の風致を支えてきた大きな要素は宝ヶ池の山など三山の自然である。その風致を継承するために種々の取り組みがなされてきた。中でも風致に無配慮な開発への対応は一定の成果を収めてきたが、現在の課題は、むしろ上手く利用されないことにあり、生物多様性の危機と重なっている。カラコギカエデやミヤコツツジはじめ、今や貴重となってしまった里山の自然が宝ヶ池の森にはまだ存在する。都市の自然としてのポテンシャルはたいへん大きい。

都市の自然は奥山の自然に対して劣ったものと捉えられやすいが、(1) うまくデザインと管理をすれば大きな成果も期待できる、(2) 都市の土地利用や環境圧には共通性がある、種の存続に都市が責任を持たないといけない種も少なくない、(3) 身近な都市の自然の生態系サービス（恵み）は享受しやすいという大きな利点がある、(4) 外部負荷（フットプリント）の小さな自然共生型生活の基盤となる、などの大きな効果がある。都市の自然の保全再生と有効利用の B/C（費用対効果）はたいへん大きいという試算もある。市民の「庭園」とすることとも言える。

2) 京都の生物多様性の危機

「京のよきもの」のひとつ京松茸が危機となって久しいが、五山の送り火に使うアカマツも、もう地元では賄えなくなってきた。鞍馬の火祭りの松明には「山で柴刈り」をしたコバノミツバツツジという美しい落葉性のツツジも含まれる。祇園祭に厄除け粽（ちまき）に使われるチマキザサも、数年前の一斉開花のあと、通常なら実生更新するはずが、シカに採食されて、絶滅の危機。このように、歴史的には風水立地を生かした持続可能な文化を謳歌してきた京都なのだが、現代に至っては、その資源を利用しないことで植生遷移が進行し、逆に生物多様性の危機を招いている。地元資源はそのままに、外国からの供給過多の、いわばメタボ化した私たちの都市と生態系のシェイプアップが課題だ。

3) 保全・利用・恵みとコストの共有

さて、それではこれからどのように対応すればよいのか。本来的に京都は自然環境、つまり生態系と生物多様性を持続可能な都市づくりに生かしてきた都市であることに鑑み、生物多様性条

約の3つの目的に即して、みなを知恵を出し合い、低炭素・循環型・自然共生の持続可能な町づくりに舵を切ることがカギではないか。特に気候変動による災害リスクが増大していることに鑑み、風水の原点、つまり都市インフラおよび資源としての自然環境のアセット・マネジメントだ。

【保全と再生】自然資源も文化資源も重要なものはランダムには分布せず、帯状に分布することが多い。水辺、山辺、尾根筋である。異なった生態系の推移帯（エコトーン）が大変重要な意味を持つ。そうしたところを中心に保全・再生を図ることが効果的であることは、19世紀のボストン以来、実証されている。三山も同様ではないことに留意して、自然と文化の再生を検討したい。宝ヶ池公園もサクラ林整備を機に、カブトムシのとれるミヤコツツジ、カラコギカエデを含む森の再生めざして、収穫、更新が必要で、炭焼き等の方法が考えられる。

【持続可能な利用】木材や檜皮生産等の伝統的なあり方に留まらず、平安京の昔に因み、三山はアカマツだけでなく、野生サクラ類とツツジ類も含む景観林の視点が欲しい。京松茸を復活したい。一方、ナラ枯れ木の多様な再利用など、新たな資源利用の開発が必須だ。こうした利用は単にその産物のみならず、自然資源利用開発に参加する運動への参加を通じたコミュニティの形成という、新たな文化的価値を生んでいる。子供の環境教育やストレス社会におけるQOLの観点からも、都市に隣接した三山は大きな価値を生む。宝ヶ池公園の森も、「使って守る」視点を導入して、市民参画の枠組みを構築したい。

【恵みとコストのシェア】

三山の恵みは広く市民が享受するのだから、そのコストもシェアする仕組みを作る。「東山伝統文化の森」や「京都モデルフォレスト運動」はその端緒を切り開いた。今後は更にもっと多様な可能性を育む枠組みが欲しい。4つに分類される生態系サービス（供給、調整、文化、支持）の三山のポテンシャルと開発可能性は市民と産官公学が協力することでたいへん大きくなる。つまり、三山を市民の「庭園」としたい。古典的な都市公園の枠組みを超えた取り組みは横浜市や一部国営公園でも進んでおり、宝ヶ池公園も子供の楽園の活動から、森全体を対象とした活動への展開が期待される。

参考文献

- ・森本幸裕・夏原由博編著（2005）『いのちの森-生物親和都市の理論と実践』京都大学学術出版会
- ・森本幸裕（2010）都市と生物多様性、*科学 Vol. 80, No. 10*: 1023-1028、岩波書店
- ・森本幸裕（2011）都市の生物多様性：“Do you KYOTO?”を超えて、*ビオンティ No. 47*:62-71
- ・森本幸裕編著（2013）『景観の生態史観-攪乱が再生する豊かな大地』京都通信社